

弥生時代九州の居住規定

春 成 秀 爾

1 序 説	c 長崎県平戸市根獅子遺跡
2 北九州の居住規定	d 佐賀県東松浦郡大友遺跡
a 福岡県甘木市栗山遺跡	e 熊本県天草郡沖ノ原遺跡
b 福岡県筑紫野市永岡遺跡	f 西九州漁撈社会と居住規定
c 福岡県春日市門田遺跡	4 南九州の居住規定
d 2行配列墓地の成立と解体	a 鹿児島県熊毛郡広田遺跡
3 西九州の居住規定	b 鹿児島県熊毛郡鳥ノ峯遺跡
a 長崎県長崎市深堀遺跡	c 漁撈社会における双系制の問題
b 長崎県佐世保市宮の本遺跡	5 結 語

1 序 説

弥生時代における九州と畿内は、それぞれ銅矛と銅鐸に代表される異なる形態の祭器の使用、青銅製武器や鏡の副葬の有無に鮮明に示されていることもあって、つねに比較され、論じられてきた。しかしながら、議論の多くは、祭祀形態や墓制の表面的なちがいの指摘にとどまるか、そうでなければ、いわゆる邪馬台国論争にまきこまれて十分な展開をみていない。

だが、そうした大勢の中にあって、かかる差異をもたらした要因について、それぞれの社会自体のもつ独自の構造・性格のちがいとしてとらえようとする試みもまた、幾人かの研究者によって進められてきた。

戦後まもなく、藤間生大氏（1951 a・b）は、国家権力に先行する形態として共同体による「強制力」についての理論的な検討を行った。それから十余年後、氏の問題提起をうけた原島礼二氏（1968：95～108）は、近畿と九州の社会を比較する際に、「強制力」の観点を導入し、近畿地方を中心に分布する銅鐸を「若干の農業共同体を包括する部族」によって共有されていたと想定し、それを用いる農耕祭祀の集団性に着目する。銅鐸祭祀はその主宰者の権威を増大させ、世帯共同体の剰余を吸収・集中し、その私的利害を強制力によって制約しやすかったこと、強制力が生産を左右する

存在として強化されたことを考えるのである。銅鐔分布圏における弥生時代の墓葬に副葬品が北九州とは比較にならないほど貧弱である点についても、私有制の発達が共同体の強制力によって抑えられていたからだ、とみる。さらに、共有下におかれていた鉄器による戦争や集団的労働も世帯共同体の自由な発展を抑え、強制力の主体を強化するのに役立った、と考えるのである。

それに対して北九州では、甕棺墓にしばしば銅鏡・銅利器・鉄利器・玉類が副葬されている。それらを被葬者個人の私有物とする通説に従えば、富が有力な世帯共同体の私富に還元されていたことになるが、それは生産と防衛に必要な共同行動の編成がその主宰者の役割を著大にし、この主宰者が大陸との交易・朝貢や北九州内部における集団連合との交易・交流を代表していたからだ、と考える。また、北九州における鉄器の発見遺跡は他地方にくらべると圧倒的に多いが、これも銅鉄製品の私有傾向に対応する、とみなす。

以上のように、「世帯共同体の自律性を鉄製農具の集団的所有によって抑制し、抑制する強制力を発展させて階級支配の機構に転化させる条件は、北九州と本州西半部ではやや異なっていた」。そして、「この相違が政治史の発展に果すべき役割は小さくないと考える」と示唆したのである。

都出比呂志氏（1970：54～55）は、弥生中期に世帯共同体の自立性を高める基盤が相対的に強く、首長の私有財形成を阻止する農業共同体規制力が弱い北九州と、その逆の畿内や吉備地方、と評価し原島氏の論旨を継承する。そして、そのちがいを生みだした基盤を、両地方の灌漑構造や社会的分業のちがいに求め、「共有制にもとづく共同体規制を早くつくりあげた畿内社会が、共同体規制力のピラミッド的集約としての政治的結合体をいち早くつくりあげて政治的優位を確保していったのであろう」との展望を示した。

それに対して甲元真之氏（1974：87～98）は、北九州社会と畿内社会とのちがいを親族構造のちがいによって説明する。すなわち、まず、西日本を出土人骨の形質と考古学事実にもとづいて、福岡・山口から若狭湾付近までの沿岸地帯と西・南九州とに分け、瀬戸内東部から畿内・濃尾平野を一つの地域としてとらえる。そして、「民族例によると、双系制社会では、不動産を除いて個人が生前獲得したものは個人にすべて所有される」として、宝器類が一代限りの保有で、個人の死とともに副葬される北九州社会は「社会的地位の継承性」のない双系制と理解する。それに対して、畿内社会は、銅鐔を初めとして青銅祭器が共同の儀器として伝世されていたと想定されることから、「成立当初から、富の蓄積や継承が可能な父系的な出自関係に基づく社会を

形成して」、その「一方では、青銅器を農耕儀礼の共同祭器として、ムラ共通の農耕祭祀を営みながら集団を結集し、農耕生産の高まりの中で、水系を中心としてその領域を拡大していった」と結論づける。

また、酒井龍一氏（1974, 1978 a : 62~65）は、北九州と畿内における弥生中期の石斧や石庖丁の素材のあり方が、九州では、小地域単位で完結するのに対して、畿内では広域の流通圏を成立させている点を指摘し、「畿内大社会」と呼ぶべき緊密なまとまりの成立を想定する。そして、後者においては、「それを構成する諸集団の文化的等質性と社会的平等性……を生じせしめ、反対に特定個人や集団の傑出性を決定的に押さえることになる。とうぜん特定個人や集団に所属する宝器や副葬品あるいは蓄積物の出現は押さえられ、それにたいして共同体レベルの祭器はいちじるしく発達する」と見通している。

以上、諸氏の主張の骨格部分を瞥見してきたように、それぞれすぐれた視点が示されていると考えるが、こうした問題の解明にはなお多方面からのアプローチを必要とすることはいうまでもない。ここではふれなかった銅鐸などによる祭祀・信仰の共有にもとづくイデオロギー的な連帯性の問題も、筆者（1978, 1982 c）や酒井氏（1978 b）がとりあげ始めている。

また、原始社会における集団の統合問題を論ずるには、それと重大な関連をもつと考えられる親族構成の次元にまで問題を掘り下げる必要があると考えられるにもかかわらず、その点に関しては、甲元氏の論考のほかは、筆者が西北九州中期に妻方居住婚が支配的であったという予報的な文章を書き（春成 1979 : 60）、また最近、都出比呂志氏（1982 : 26~39）が、畿内地方について弥生土器の地域色のあり方から、「夫方居住婚あるいは夫方、妻方どちらかに住む選択居住婚の可能性が高く、当時の女性は、自分が住むのと同じ集落、あるいは近隣の集落の男性との婚姻を基調としつつ、ときには旧制の郡をも越える遠くの人との婚姻をとりむすんだ」と論じているにとどまるからである。

もちろん、親族組織自体も他から自立した存在ではなく、一面においてはすぐれて性別分業や労働組織の反映であったであろうが、他面においてそれらと不整合部分をもつ、例えば前代からの伝統的な要素がもちこされているばあいもある。

そこで、九州社会と畿内社会とを今後比較・検討していくことを目標にして、手はじめに小論では、弥生時代九州における婚姻関係成立後の居住規定について推論することにした。筆者はさきに、福岡県山鹿遺跡の縄文後期に属する墓地および装身具着装例ならびに長崎県根獅子遺跡出土の弥生前一中期に属する人骨の抜歯型式にもと

づいて、縄文時代後一晩期の九州地方の社会は、妻方居住婚が優勢であったこと、ひいては母系的な社会構成をとっていたことを推定しておいた（春成 1979, 1982b など）。

本稿では、それを承けて、一つの地方において稲作農耕の開始という生業における大きな変換が、社会組織をいかに変化せしめたのかについての見通しを得たいと思うのである。しかしながら、一口に九州といっても、例えば、稲作を主体とする北九州と弥生時代にいたっても漁撈を主体とする西北九州との間には、親族組織においても当然、地域差がありうることを予想しうる。したがって、小稿では、九州を北・西・南に分けて論じる。東についても当然ふれるべきであるが、いまは適当な資料を欠いているので、やむをえず今回は省略しておくことにしたい。また、北九州では問題の地域である玄海灘沿岸の平野部の諸遺跡について分析すべきであるが、これも近い将来にまわすことにして今回はほとんど触れない。

2 北九州の居住規定

弥生時代九州の墓地遺跡で広範囲にわたって調査された例では、しばしば、10～20基でいどの墓の密集した場所が数箇所認められ、それぞれの間に空閑地が存在する現象を指摘することができる。この現象は、早く、島田貞彦氏による福岡県春日市須玖遺跡B地点の調査時に気づかれていた（島田 1930：15～16）が、戦後、鏡山猛氏は福岡県山門郡鉢田遺跡や春日市日佐原遺跡の調査の際にもふたたび確認し、集落遺跡の分析にもとづく集団諸位相との対比を試み、甕棺の密集分布に重要な意味が秘められているとの考えを提示した（鏡山 1957, 1959）。

その後は、甕棺墓が多数検出された遺跡の報告書中においては、大抵のばあい、グルーピング作業の結果が提示され、その意味づけが試みられている。例えば、高倉洋彰氏（1973：8～10）は、佐賀県宇木汲田遺跡の甕棺墓群の群別を行い、前期末にみられる5群を、それぞれ別個の単位集団に比定し、地縁的な結合を想定している。言いかえると、いくつかの居住集団が一つの共同墓地をもつというのである。その一方、高島忠平氏（1979：316—319）も、佐賀県神埼郡二塚山遺跡の分析を行った際に、約250基からなる墓を時期ごとに分類・整理し、ある一時点の人口を20人強と算出し、一見、「大集団、ないし複数の個別集団」の墓地に見えるが、事実是这样ではなく、一世帯共同体によって継続的に営まれた墓地にすぎない、との対立する見解を示している。

さらにまた、最近では、福岡県門田・原・永岡・吹田・栗山遺跡や佐賀県二塚山・四本黒木・宝満谷遺跡等において、一見墓道状の空閑地を間にはさんでその両側に甕棺墓が明瞭に二群別する例がふえており、注目されている。こうしてみると、墓域全体の形状にせよ、個々の小グループにせよ、一定の原理に則って形成されたものであることは明らかであるから、個々の墓の位置もまた決して無秩序に定められたものではない、との判断を下さざるをえないであろう。本章では、この埋葬原理を明らかにし、その背後に横たわる社会の構成原理と段階を追究することを課題にする。

最初に、近年、福岡県・佐賀県下において報告例が増加しつつある甕棺が整然と2列に配列されている墓地のうち、人骨が遺存し被葬者の性があるていど判明している例をとりあげて分析することにした。そのためには墓地の群別が重要な作業となるが、その際の留意点は次のとおりである。

2列に並行する大部分の甕棺は、長軸は列の方向と一致する。したがって、頭位方向も列の方向と一致するが、そのばあい正方向と逆方向がありうる。それがいかなるばあいに区別されているのか、当然問題となる。また、稀に列と直交するものが含まれており、これはグルーピングの際、注意すべき存在である。さらに、甕棺墓群が列をなしているといっても、それらは等間隔に埋められているわけではない。ところどころにやや大きな間隙をもっているのが普通である。この事実は列内でのグルーピングが可能であることを示唆している。その一方、間隙がほとんど認められなかったとしても、そこに埋葬小群の境界がないとも限らない。それは個々の甕棺の時期、位置関係および頭位方向などによって判断すべきであろう。

a 福岡県甘木市栗山遺跡

栗山遺跡は、すでに1962年および1964年の県立朝倉高校史学部の調査時に、甕棺墓地の一角に遭遇し、甕棺29基が発掘されていた（朝倉高校史学部 1969）。その時期は、中期後半から後期初頭を主体とする（柳田 1982）。

その後、1981年にいたって、福岡県教育委員会によって、その南東約100mの地点が発掘され、またも甕棺墓地の一部が明らかとなった。発掘された77基の甕棺の時期は、Ⅰ期からⅦ期までに分類され、中期初頭から九州後期初頭におよんでいる（佐々木編 1981）。各時期を橋口達也氏（1979）の甕棺編年案で示せば、Ⅰ期＝KⅡa期、Ⅱ期＝KⅡb期、Ⅲ期＝KⅡc期、Ⅳ期＝KⅢa期、Ⅴ期＝KⅢb期、Ⅵ期＝KⅢc期、Ⅶ期＝KⅣa期となる。

時期を追って細かくみると、Ⅰ期は2基存在するにすぎないが、Ⅱ期からⅢ期一部

はⅣ期までの間は、甕棺が北東―南西方向に2列に並行するように配列されている事実が注目された（A群）。そして、Ⅴ期一部はⅣ期からⅦ期にかけては、先の2列配置の甕棺群とは位置をずらして特定の2個所に集中的に分布している（B群、C群）。しかし、それぞれの群内では2列配置の原則はみられない。

まず、A群について詳しくみていきたい。ここで記述の便宜上、北側の1列を北列、南側の1列を南列と呼ぼう。北列・南列とも完全な直線ではなく、どちらも北列に中心をもつ弧状に屈曲している。北列と南列の間隔は4m前後でほぼ一定している。しかし、中にはその列を乱す例も含まれており、また甕棺の長軸つまり遺体の頭位方向も、北列では成人棺11基のうち1基、南列では成人棺10基のうち2基が列と直交している。

さて、北列・南列からなるA群は、さらに注視すると、列と直交に並ぶk21・k20・k18の3基と同じくk15・k16の2基との間には4m前後の空閑地があり、その距離は北・南列の間隔にほぼ等しく、A群の列状配置を直角方向に分割する線が存在することも考えなければならない。この線を境にして北列で隣接するk21とk15の頭位方向が逆転すること、そして、k15の内側にあたるk12・k13が列の方向と長軸を直交させていること、2列配置を乱しているk20がk21とk18を結ぶ一線に位置することも、上記の分割線の存在を積極的に傍証しているといえよう。

この観点からすると、北列のk27とk28とが近接しているにもかかわらず、やはり頭位方向を逆にしてしている点が注意される。そこで、南列をみると、k26が南列方向と90度主軸をちがえていることに気づく。すなわち、北列・南列とも同じ個所で方向をちがえているのである。時期的にk27がⅡ期であるのに対してk28はⅣ期であること、k32がⅢ期であるのに対してk26はⅣ期であることから推定すれば、当初は確保してあった空閑地が、埋葬が増加するにつれて失われていったことを示しているであろう。

以上のように考えてよければ、A群は北列と南列に分割できると同時に、北列と南列のそれぞれ一部分を合わせて一単位とする3群（それをA1群、A2群、A3群と呼ぼう）に群別できることになる。

上記の3群のうちA2群は完掘されているが、A1群とA3群については発掘区外までのびていることはほとんど確実である。そこで、A2群を1群の基準として用い他の群の復原を試みたい。A2群は北列に成人棺3基が比較的整然と並んでいるのに対して、南列は雑然としている。その理由の一つは、栗山遺跡のA群からC群までのうちでもっとも古いⅠ期に属するk24・k25の成人棺2基がこのA2群中に含まれて

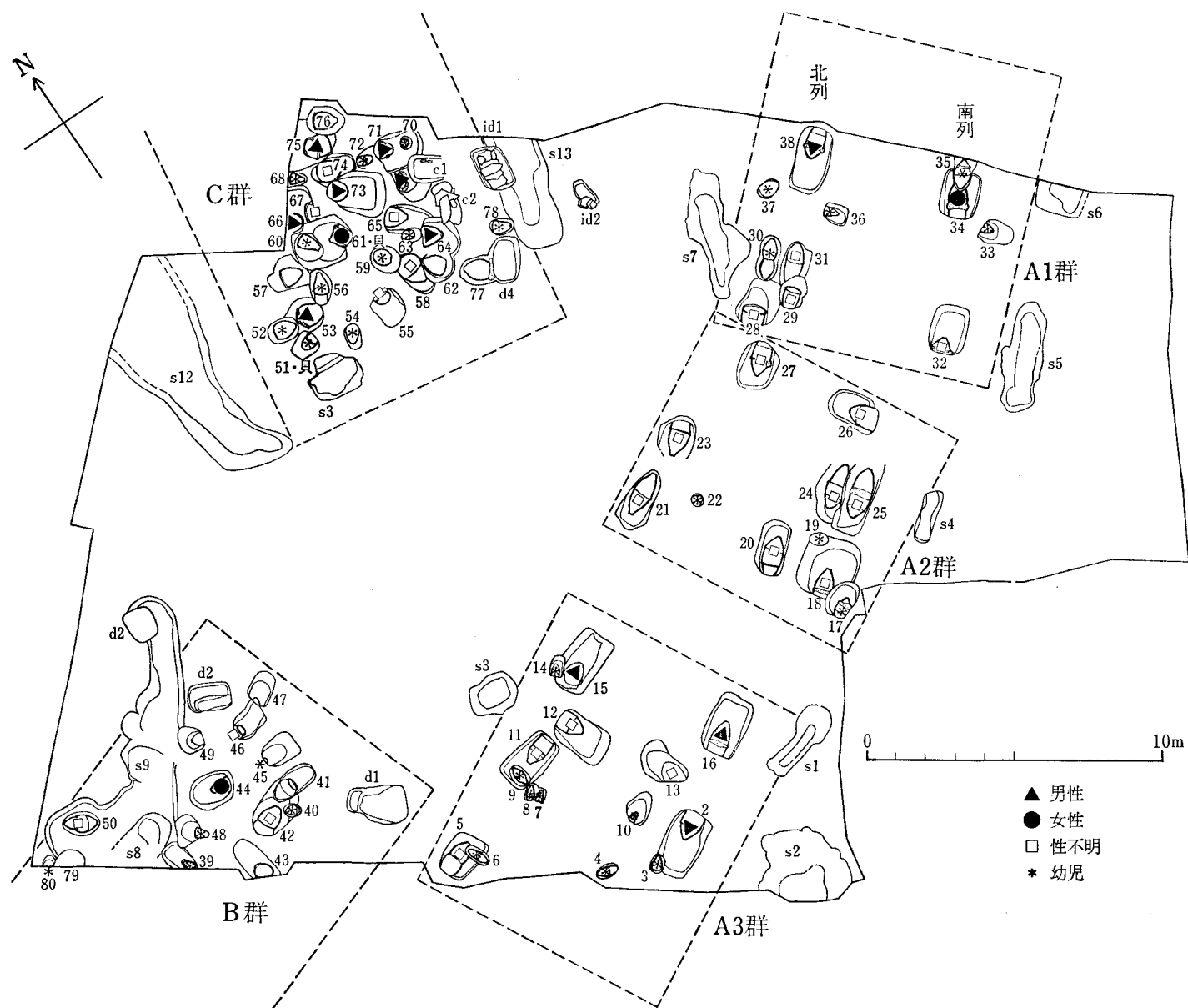


図1 福岡県栗山遺跡の2行配列墓地の群別 (佐々木編 1982原図から作成)

いるからであろうと思われる。Ⅲ期のk 20が本来、南列の中に入るべきものでありながら列から外れているのも、Ⅰ期の2基の存在が大きかったのであろう。そうとすれば、A 2群の北列3基を基準にして、A 1群の北列には発掘区外にⅡ期に属する甕棺1基、南列にはⅢ期の甕棺1基の存在が予想される。

そして、A 3群では、発掘区外に南列にⅢ期の甕棺がもう1基埋もれていることが考えられる。つまり、A 1～A 3群は、A 2群が他に先んじてⅠ期に形成されはじめたが、Ⅱ期になると、3群とも出そろってⅣ期まで併行して墓地は利用されたわけである。

なお、以上のようにA群の両端は未発掘であるから、栗山遺跡における列状配置分の群の数については不明であって、現状では3ないしそれ以上としか言えない。

次に、成人墓の性についてみていきたいが、性の判明する例はごくわずかである(表1)。

表1 栗山遺跡の埋葬小群の構成

時期 群	北 列				南 列				計
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	
A 1 群	—	(?) I 2	男1, ?1, I 1	?2	—	女1	?1, I 1 (?)		男1, 女1, ?4, I 4
A 2 群	—	?1	?2	—	?2	?1	?1, I 1	?1	?8, I 1
A 3 群	—	—	男1, ?2, I 5	—	—	男1, I 1	男1(?) I 2	?1	男3, ?3, I 8

時期 群	IV	V	VI	VII	計
C 群	男3, 女1, I 1	男1, ?3, I 1	男1, ?6, I 3	男2, ?4	男7, 女1, ?13, I 5
B 群		?2	?3, I 6	女1, I 1	女1, ?5, I 7

(?) は推定
I は幼小児

まず、はっきりしていることは、南列に男性2、女性1が含まれていることであって、南・北の区分すなわち棺の2列配置が性にもとづくものではないという点である。

次に、北列の甕棺はそれぞれ南列の甕棺とほぼ並ぶ位置にあるが、性のわかっている例では、A 1群ではk 38男性とk 34女性が並んでいる。そのいっぽう、A 3群においては、k 15男性とk 16男性が並んでおり、男女の甕棺が並ぶという原則は指摘できない。

また、北列と南列とで甕棺の形状・墓坑の形状が異なるといったちがいがみられない。

さらに、装身具着装例については、朝倉高校調査分には、7号・女性の貝輪11個着

装例が検出されているが、福岡県教委調査分にはまったくみられなかった。

なお、小児墓の帰属の問題について一言ふれておこう。小児棺は北列に8基、南列に7基含まれており、どちらかの列にかたよるという傾向は認められない。また、男性棺と重なるものが2例、女性棺と重なるものが1例あるので、どちらかの性に限られるというのでもない。ただし、小児の性は不明であるので、成人の性と小児の性との関係については発言できない。

以上検討してきたように、北列・南列間に決定的な差異を見出すことは困難である。ただ、わずかに注意されることとして、発掘範囲内で最古のⅠ期の甕棺2基がともに南列に属している点があげられる。つまり、Ⅰ期の2基の甕棺を起点にして、その二方向へと延長する形でA1・A2・A3群の南列が同時に設定された可能性が考えられるのである。

なお、A1～3群については、そのまとまりを規定している方形区画の存在を予想するならば、おおよそ次のようになる。

A1群 11m×10m

A2群 9m×10m

A3群 11m×10m

b 福岡県筑紫野市永岡遺跡

国道3号線バイパス建設工事に先だって1972年に福岡県教委により第1次調査が行われ（浜田・新原編 1977）、その後、1980年には宅地造成工事のために筑紫野市教委によって第2次調査が実施され（浜田 1981）、甕棺墓地はほぼ完掘された。

墓地は土坑墓10基、木棺墓20基、甕棺墓152基からなり、全体の形状は弓なりに曲がる長さ約160m、幅14m前後の帯状を呈する。木棺墓は、北半部に集中し、しばしば甕棺墓によって切られており、古い。木棺墓の配列は、2列になっているところもあるが、木棺の長軸が帯状と平行するものと直交するものとが混在しているため、それほど明瞭ではない。それに対して、甕棺墓のばあいには、大部分が帯状と平行し、2行配列の傾向はきわめて容易にみとれる。以下、甕棺の東側の列を東列、西側の列を西列と呼んで記述していこう。

東列は第1次調査時には成人墓12基（男5，女7）、列を乱してはいるが東列に属するとみられるもの成人墓3基（女3）、合計15基（男5，女10）となっている。ただし、未発掘部分、既破壊分を考慮すると成人墓の本来の数は、18基ほどはあったと推定される。

それに対して、第1次調査時の西列は、成人墓8基（男3，女4，不明1），列を乱しているものを含めても、合計9基にすぎない。しかしこれは、未発掘部分が多いからであって、本来は15基位はあったと復原すべきであろう。

したがって、東列・西列ほぼ同じということになるが、仔細に観察するならば、東列と西列の間では、東列がわずかに多いこと、しかもそのうち3基は列を乱している女性の墓であることが注目される。

小児墓は合計28基発掘されているが、未掘部分をいれると約30基をこえていたであろう。つまり、成人墓とほぼ同数と考えてよい。その大部分は成人墓の墓坑の一部を切ってつくられている。したがって、成人の死がまずあって、そのあと小児の死がつづいたことになる。小児墓は東列・西列ともに伴い、東列は14基、西列も14基と同数である。成人墓の性との関係では、東列では男性墓に伴うものは1例2基に対して、女性墓に伴うものは5例10基であり、女性墓に伴う例が圧倒的に多い。西列では、男性墓に伴うものは2例3～4基に対して、女性墓に伴うものは3例6～7基となり、東列と同様の傾向を示している。成人の年齢との関係をみると、11例のうち壮年4例、熟年6例、老年1例となっており、高年の女性または男性に伴う例が60%をこえている。しかも、成人のほうが先に死亡しているのであるから、成人と小児の間の年齢差は一層ひらく。女性の墓に小児墓が伴うと、すぐ母子と速断されがちであるが、実際はそれほど単純でないことを教えている。しかも、男性と小児との組みあわせも少なくないのである。問題は成人の性と小児の性との間に何らかの法則性が認められるかどうかであるが、この点は小児の性が一切不明な現状にあっては推測する以外にない。

さて、永岡遺跡の南半部・第1次調査時検出の甕棺について、調査者の浜田信也氏は、汲田式より後出し狭義の須玖式より古く、両型式の中間的なものが多く、単純遺跡としてあつかえろといい、永岡式の呼称を提唱している（浜田・新原編 1977）。その後、北九州の甕棺の細かな編年案を提出した橋口達也氏（1979）の労作においては、KⅡc式の代表例として永岡遺跡の甕棺を挙げている。永岡遺跡の北半部の調査が行われたのは、その後のことであるが、調査概報によれば、「南北に長く造営された当墓地は、甕棺使用の甕形土器からして、北から南に向けて順次埋葬されていた」と考えられている（浜田 1981）。したがって、永岡遺跡の墓域構成をみていくうえで、汲田式の細分あるいはKⅡb式とKⅡc式の区別は重要な意味をもつ。橋口氏のいうKⅡb式の特徴は、1）口縁下がすばまる、2）胴部突帯の位置が中位にあるのに対して、KⅡc式は、1）口縁下がすばまらない、2）胴部突帯の位置が下位にあ

る、とされている。

しかしながら、永岡遺跡南半部の個々の甕棺にあたってみると、Ⅱc式だけでなく、Ⅱb式や口縁下に突帯をめぐらすⅢa式も含まれているし、さらに口縁下がすばまり胴部突帯が下位にある例や、口縁下がすばまらず、胴部突帯が中位にあるⅡb式とⅡc式の間隔的な型式が少なからず含まれている。

そこで、両者の中間的なものを、ⅡaかⅡbのどちらかにあえて帰属させることはさけて、とりあえずⅡa～b式として扱うならば、永岡遺跡の成人甕棺墓の時期別にみた数的構成は次のようになろう(表2)。

表2 永岡遺跡の南半部の構成

	Ⅱb	Ⅱb～c	Ⅱc	Ⅲa	計
東列	5(男2, 女3)	5(男2, 女3)	3(女3)	2(男1, 女1)	15(男5, 女10)
西列	4(女2, ?2)	2(男1, 女1)	3(男2, 女1)	—	9(男3, 女4, ?2)

すなわち、南半部はⅡb式からⅢa式期まで継続的に埋葬が行われているのであって、決してⅡc式期に限定されているわけではない。北半部の第2次調査時の甕棺については詳細な報告がなされていないので判断はしかねるが、南半部の実態からすると、やはりⅡb期だけに限定されるのではなく、少なくともⅡc期までは存在するのではないかと予想される。

ところで、永岡遺跡の北半部についてみると、2列配置の甕棺墓群のそれぞれの列は、ほぼ等間隔に甕棺が配置されている部分とそうでない部分とがあることに容易に気づく。とりあえず小児用の甕棺をのぞいてみるならば、北端部の東・西列の計6基と次の6基との間には、成人用甕棺の埋蔵されていない空閑地が存在し、ここに分割線の存在が想定される。前者を第1群、後者を第2群と呼ぶことにしよう。第2群のうち北よりの4基と次の2基との間には約5m、甕棺1基分の空間があるが、それは東列の2基の木棺墓が先行してつくられていたからであろう。第2群が終ると次の第3群7基までの約10mの間は、やはり先行する計7基の木棺墓がみられる。永岡遺跡の列状配置は、この第2群と第3群との間でく字状に大きく屈折する。そして、第3群の次に約9mの間を置いて第1次調査時に発掘された5基以上からなる第4群がつづく。第4群は南北両端とも未調査であるが、東列に併行してその外側に掘られている溝がk42のすぐ東側で切れていることを考慮するならば、第4群もk42を北端としている可能性がつよい。そうであれば、西列にもう1基成人甕棺が埋もれていることになる。以上で第4群は成人棺5基となり、第1群・第2群と同基数となるので、

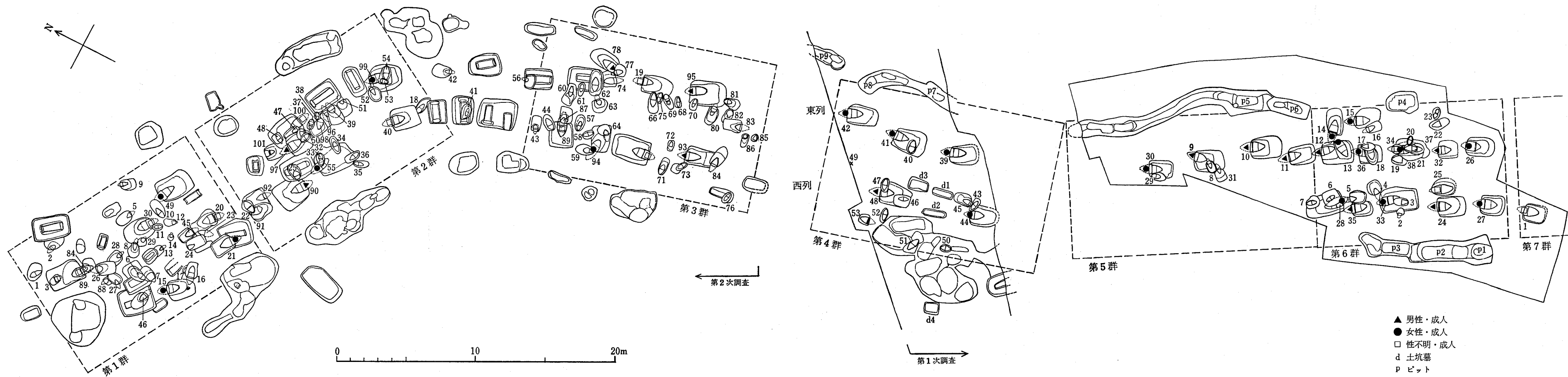


図2 福岡県永岡遺跡の2行配列墓地の群別 (浜田・新原編 1977, 浜田 1981を合成, 甕棺墓の号数の頭のkは省略)

南端については、すでに発掘されているk39とk44と推定することも可能であるけれども、そうすると第4群の性別構成は男性1、女性4となり、不明の1を男性としても、男性の数が少なすぎて、東列・西列全体のバランスが崩れてしまう。そこで、それぞれの南側にあと1基ずつ男性棺の存在を予想するほうが妥当かもしれない。

第4群と次の第5群との間は未調査のまま破壊されているので、第5群の始まりがk30かどうかはよくわからない。東側の溝状遺構が、k30より北までのびている点を参考にすれば、k30より北にもう1基あってもよいように思われるが、もちろん確実とはいえない。第5群から南は甕棺が密接して永岡遺跡全体の南端まで連なっているため、第5群の南端を決めることは困難である。しかしながら、第1群～第4群までは一群が平均して6～8基の甕棺墓からなりたっている点を参考にすれば、第5群も東側の溝が途切れるk11を南端とみなし、k12とk28から以南は第6群として分離すべきであろう。Ⅱb期に属する甕棺が東列では第5群でk9とk30、第6群でk38とk32で、二群間の距離が約12mへだたっていること、Ⅲa期のk10とk26の2基がやはり15m近く離れていることも、この考えを支持するであろう。さらに、東列を乱しているk13・k14・k15も、k11とk12との間に境界線がはいると考えたほうが、その理由を説明しやすいと思われる。西列のばあいも同様にⅡb期の甕棺はk28とk25であるから、やはり6mは間隔があいている。したがって、kⅡb～c期以降の流れも参照しながら、第6群が存在する可能性はつよいと考えたい。

では、第6群の南端はどこと考えるべきであろうか。調査者によると、東列のk26以南、西列のk1以南は、地山面が浅く、甕棺が存在することはもはや考えられなかったという。しかしながら、西列の西の溝がk27付近で終ること、k1がⅡb期に属し同じくⅡb期のk25との間に一定の距離をおいていることからすると、k1を北端として南のほうへ展開する第7群が本来は存在し、のちに削平され消滅した可能性も完全に否定しすることはできないように思われる。

そのように考えてよければ、第6群は東列8基（男2、女6）、西列6基（男2、女3、不明1）、第7群が存在しないとすれば西列は性不明が1基ふえて7基となる。いずれにしても永岡遺跡の中では、この第6群（～第7群）は、占める空間は第1～第5群とくらべてもさして変らないのに、甕棺の数だけは他のほぼ2倍あって密集し、しかもk14やk15のように東列から派生する墓を含むなど、永岡遺跡のあたかも中核的な埋葬小群の様相を呈している点が注目される。

以上に述べてきた成人墓の埋葬小群を整理すると次のようになる（表3）。

表3 永岡遺跡の小群構成

	東 列	西 列	計
第1群	3	3	6
第2群	3	3	6
第3群	3	4	7
第4群	3(+1?)=(男1?), 女3	2(+2?)=男1(+2?), 女1	5(+3?)=男1(+3?), 女4
第5群	4(+1?)=男3, 女1, (+?1)	(+5?)	4(+6?)=男3(+2?), 女1(+4?)
第6群	8 =男2, 女6	6 =男2, 女3, ?1	14 =男4(+1?), 女9
第7群	(+)	1(+)= ?1	1(+)= ?1

c 福岡県春日市上白水門田遺跡

門田遺跡は、山陽新幹線の車輛基地建設のために1974年に発掘調査された(佐々木編 1978)。墓地は、甕棺墓69基、木棺墓1基、石蓋土坑墓1基、土坑墓1基、箱式石棺墓5基からなり、比高10m余の台地上の南縁辺部とやや高所の平坦部にのこされていた。時期は、弥生中期前葉にはじまり後期末まで及んでいる。

ここで問題にする甕棺墓の内訳は、前期末1基、中期前葉34基、中期中葉14基、中期後葉～後期初17基、不明3基である。台地縁辺部の一群は、甕棺墓のみからなり、列状配置のものを含んでいる。明瞭な2行配列をとっているのは中期前葉だけであるが、中葉まではまだ以前の列状配置の規制をうけているように看取される。

門田遺跡で2列配置されている墓は、そのほとんどが中期前葉、橋口達也氏のいうKⅡb式からKⅡc式までの間にのこされたものである。しかしながら、KⅡb式が17～19基あるのに対してKⅡc式は3～4基にすぎない。なお、KⅢa式は6基、KⅢb式は5基である。北側の列を北列、南側の列を南列と呼ぶと、北列・南列の構成は次のとおりである(表4)。すなわち、北列・南列とも男女両性を含む。性不明例が北列

表4 門田遺跡の2列の構成

	北 列		南 列	
	前 葉	中 葉	前 葉	中 葉
計	10(男2, 女3, ?5)	2(女1, ?1)	7(男4, 女2, ?1)	1(?1)

に6基、南列に2基あるために断定はできないが、傾向としては北列は女性がやや多く、南列は男性がやや多く、北列と南列の間には相補の関係があるように思われる。

次に、栗山遺跡や永岡遺跡において認められた列と直交する分割線は、門田遺跡においてはその存在を指摘することは容易ではない。その大きな理由の一つは、東側の

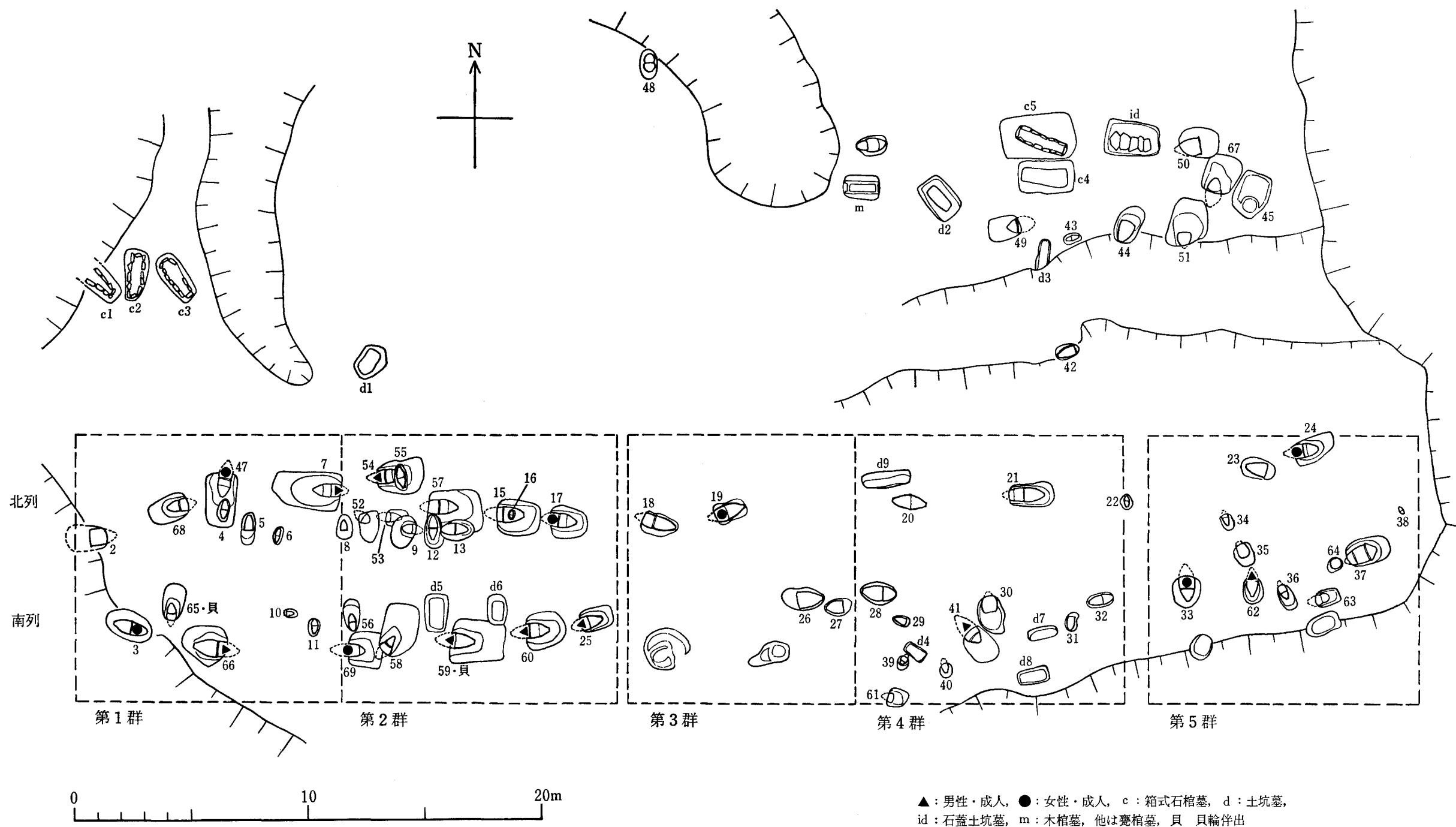


図3 福岡県門田遺跡の2行配列墓地の群別（佐々木編 1978原図から作成）

2/3以上は一定程度の削平をうけているため本来の状況を正確に把握することが妨げられているからである。しかしながら、不可能というほどでもないように思われるので、その試みをつづけていきたい。

門田遺跡においても、甕棺の密集分布と空閑地を切り所にすれば、西から第1群～第5群まで存在することを指摘できる。各群の内部構成は次のとおりである（表5）。

表5 門田遺跡の埋葬小群の構成

	北 列	南 列	計
第1群	4 (男1, 女1, ?2)	2 (男1, 女1)	6 (男2, 女2, ?2)
第2群	4 (男1, 女1, ?2)	5 (男3, 女1, ?1)	9 (男4, 女2, ?3)
第3群	2 (女1, ?1)	4 (?4)	6 (女1, ?5)
第4群	2 (?2)	2 (男1, ?1)	4 (男1, ?3)
第5群	2 (女1, ?1)	2 (男1, ?1)	4 (男1, 女1, ?2)

こうしてみると、第2群は甕棺の数が他の2倍あり、しかももっとも整然と配列している点が注目される。南海産のゴホウラ貝輪を着装した遺体は2例あるが、いずれも南列に属し、そのうちk59は第2群に含まれている。門田遺跡では、第2群が明らかに中心的な埋葬小群のあり方を示しているが、同様な構成は永岡遺跡においても認められることは偶然的な産物ではないことを意味しているのであろう。

d 2行配列墓地の成立と解体

前節までに2行配列墓地のうち、もっとも良好な状態を保つ3遺跡について分析を加えてきた。

それでは甕棺墓を2行に配列するという習俗はいかにして成立し、いかなる要因により衰退していったのであろうか。本節ではその点を問題にするとともに、小論のテーマでもある居住規定について考察を加えたい。

栗山、永岡、門田の3個所の墓地遺跡に通してみられる特徴は、再三述べてきたように、甕棺の2行配列であるが、甕棺の細かな型式編年に従えば、2列は時間的に併行して形成されたものである。甕棺のこの配列は、被葬者群を死者の集落ともいうべき墓地において二分する原理が背後にあって初めて発現するものと考えられるが、その二分原理とは何か。

2行配列墓地においては、それぞれの列の甕棺の数には決定的なちがいが認められない。二分は不均等なそれではなく、ほぼ均等なそれなのである。人間集団の二等分

といえば、まっ先に予想されるのは性による区分であろうが、すでにみてきたように、どの遺跡においても2列と性とは合致していない。また、年齢との一致も認められない。つまり、二分が性や年齢といった直接にせよ間接にせよ、自然的な区分に基づくものでないことは明らかである。したがって、二分原理は当代の社会自体が生みだした何ものかに根ざしている、と判断せざるをえない。

では、二分の社会的な契機が何であるかを示唆する材料はないであろうか。まず、装身具は、門田遺跡においてのみ確認されている。わずか2例にすぎないが、それは南列に限られているので、あるいは片側列の被葬者の一部が着装しているのではないかと疑われるけれども、頻度が低いため判断しかねる。栗山、永岡遺跡のあり方をも参考にすれば、むしろ、被葬者群は大きく2列に分けられてはいるが、両者間には決定的な優劣あるいは上下の関係は見出しえず、両者はいわば拮抗する関係にあるといったほうがよいかもしれない。

それでは棺の2行配列は、現実の社会におけるいかなる区分を投影しているのだろうか。原始社会において、成人をほぼ同数ずつ二分する原理が、性でも年齢でもなく、階層的なものでもないとするれば、それは親族組織上の二分原理において他には考えにくい。しかしそれを1個の地域集団が二つの婚姻単位すなわち半族からなり、相互に配偶者を交換しあう双分制社会とするには、いくつかの不利な証拠がある。すなわち、二つの半族が存在する社会にはそれぞれを象徴するなんらかの標章をもっているのが普通であるが、北九州の弥生中期社会にはそのような形跡が認められない。また、このことと関連するが、半族のちがいを表現しようとするればそれが可能な甕棺を比較しても、2列の間に指摘できるような形態上・製作技法上の差異が存在しない。したがって、現状では、甕棺墓地における二分を双分制社会の反映と理解するには無理がある。そこで筆者は最後に、1集団内の構成員間の血縁関係の疎密に基づく可能性を考えてみたい。すなわち、1列に墓地を有する集団の出身者を、もう1列に他集団からの婚入者を埋葬していると推定するのである。

その一方、3遺跡ともに、2列のそれぞれ一部を合わせて一群とするまとまりが認められる。そのまとまりを埋葬小群と呼ぶことにしよう。その数は、栗山遺跡では3群以上、永岡遺跡では6～7群、門田遺跡では5群認められた。そして、その小群内では、男女は排他的ではなく、同数とはいえないまでもほぼ近い数字を示していた。しかも、一方の列に男性が多い時は、もう一方の列には、女性が多いといった相補の傾向がうかがわれた。また、甕棺の細分型式にして2～3型式の間に、1群あたり6～8人という数が多く、比較的に平均的な人数が埋葬されたことになる。ただし、永

岡・門田の両遺跡においては、一埋葬小群だけは10人前後からなっており、他の小群にくらべると著しいひらきがあった。この一小群をのぞけば、各埋葬小群は生きている社会の相対的に凹凸の少ない単位に対応する可能性がたつとえられる。筆者は、その単位を居住集団を構成している世帯と考える。これを要するに、北九州の2行配列墓地は、2行配列を経系に、埋葬小群を緯系とする構造をもち、血縁と世帯の相克を大地に刻みこんだものといえるのである。そしてそれは、居住集団内の血縁者群と非血縁者群間の緊張関係、そしてそうした矛盾を内包した居住集団間の緊張関係の表現なのであった。

こうして北九州の墓地に、血縁原理と世帯原理を見出したとしてそれらを比較するならば、前者を反映する2行配列は強烈に認められるのに対して、後者を反映する埋葬小群は例えば墳丘をもつとか何らかの明瞭な区画をもつといった事実が認められない。かかる観点からすると、2行配列墓地における規定的な原理は血縁原理のほうであったと思われる。したがって、世帯原理がたつよくなるにつれて2行配列の原理が後退ないし崩壊していくことは当然であって、栗山遺跡や門田遺跡においては、その推移が1遺跡内に鮮明に印されているのである。特に栗山遺跡においては、2行配列が貫徹されているのは中期前葉、KⅡb～Ⅱc期に限られ、KⅢa期になると若干例はそれまでの埋葬小群を踏襲するが、大半は別地点にあらたに何箇所か設定された埋葬区に移動してしまうのである。

2行配列が最初に確認された朝倉郡吹田遺跡（朝倉高校史学部 1969）においては、2列間の距離は約5m離れている一方、列内では北列に1箇所3.5mの間隔が、南列に北列とずれる位置に2箇所4.5mの間隔がある。2列合わせて一単位とする小グル

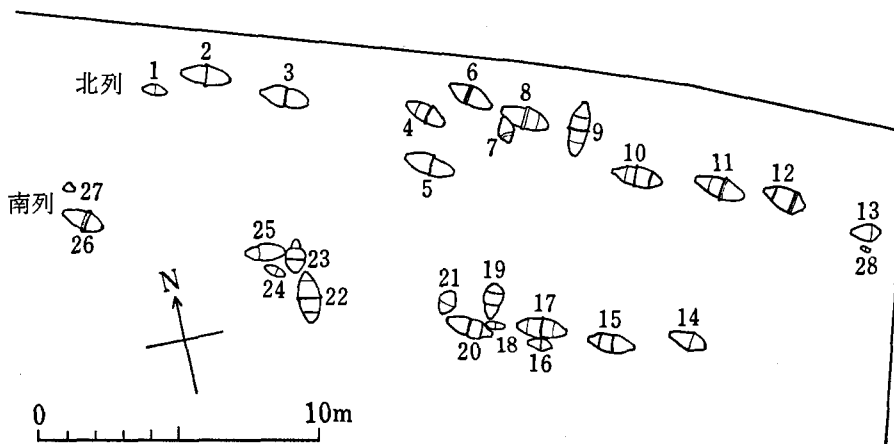


図4 福岡県吹田遺跡の2行配列墓地（朝倉高校史学部 1969原図）

ープが存在したという主張は、本遺跡の分析だけからはなしえないのも、世帯の相対的自立度の弱さの反映であろう。

したがって、以上に述べてきた社会の発展段階は、2行配列墓地のつくられた次の遺跡においても経過したと考えてさしつかえあるまい。

- 4 福岡県春日市赤井手遺跡（丸山編 1980）
- 5 " " 伯玄社遺跡（松岡・亀井 1968）
- 6 " 筑紫郡宗石遺跡（佐々木編 1979）
- 7 " 朝倉郡吹田遺跡（朝倉高校史学部 1969）
- 8 " 小郡市正原遺跡（橋口・永井 1979）
- 9 佐賀県神埼郡金立遺跡（木下編 1974）
- 10 " " 四本黒木遺跡（保存科学研究会編 1977, 八尋編 1980）
- 11 " 三養基郡北茂安町宝満谷遺跡（東中川編 1980）

それではなぜ、この中期前葉の壙棺墓地においては、身内と婚入者の区別を明確に行おうとする意識がつよく働くのであろうか。

2行配列のそれぞれの列に男女とも含まれていることは、婚入・婚出者は男女ともに存在したこと、すなわちこの社会が一種の選択居住婚であったことを推定させる。その一方、北九州の縄文後期社会に妻方居住婚が支配的であったことは、すでに述べたところである（春成 1982b, 1983b）。したがって、弥生中期前葉の北九州における選択居住婚は、夫方居住婚の抬頭による従来の妻方居住婚の崩壊過程に位置づけることが可能である。いま、「選択」の原理を詳論する用意はないが、水稻耕作の発展が夫方居住婚の出現と普及を促したことだけは容易に予想しうるであろう。そうした傾向が北九州では中期中葉に顕在化したことを示唆する材料は他にもある。

それは、ゴホウラ製腕輪の着装者が女性から男性へと転換し、また、銅矛や鉄戈などの副葬例が男性7例、女性1例、鏡の副葬例が男性4例、女性2例というように、男性への副葬が顕著になる事実である。さらに、春日市須玖や糸島郡三雲遺跡などに前漢鏡やガラス璧を副葬した「王墓」がつくられるようになることである。これらの一連の動きは、総体として、中期中葉が男性原理なり男権の著しい拡張のあった時期であることを暗示している。

それにもかかわらず、栗山遺跡で2行配列墓地が消滅した中期中葉に出現する世帯単位の埋葬小群内においては、男性または女性の優位を指摘しがたい。また、夫と妻の対置関係も明瞭には表示されていない。ただ一つの墓群の中に次から次へと埋葬がつづけられているのである。これは、世帯の相対的自立は進みつつあるけれども、個

個人の出自系統関係が制度として整理されていないことの反映なのではないだろうか。

北九州で弥生中期中葉以降も、そうした出自系統の関係を明確化していく基礎が十分にできていなかった理由を求めるとすれば、それは依然として選択居住婚的な様相が残存していたからではないだろうか。すなわち、選択居住婚がただちに「双系制」といえるほどの内容を備えた出自規定を生みだすまでには至らなかったことを意味している、と考えられるのである。

そうであれば、世帯の自立化傾向に加えて、個々人の出自系統を表示する体系を欠いているために、居住集団自体が構造上の安定性において一定の限界をもち、さらには居住集団のワクをこえる諸集団の緊密な結合を実現していく条件を不十分にしかもちあわせていなかったことを考えさせる。したがって、かかる諸集団の結合体を統べる首長がいたとしても、彼に委ねられた権限はかなり制限されたものであったと考えざるをえないであろう。

そのいっぽう、福岡市博多区金隈遺跡（折尾編 1970, 1971）、同博多区諸岡遺跡（横山編 1974, 横山・後藤編 1975）、同博多区板付遺跡（後藤・沢編 1976）や佐賀県唐津市宇木汲田遺跡（藤田ほか 1982）などの中期前葉の墓地においては、甕棺の2列配置は認められない。そうであれば、玄海灘沿岸は甕棺の列状配置の分布圏外にあった可能性がある。そして、宇木汲田遺跡では埋葬小群は明らかに存在するが、その内部での明瞭な約束ごとは認めがたい。それは、むしろ、栗山遺跡の2行配列が崩れて以降のあり方に類似するのである。したがって、この地方においては、同時期の春日市以南から佐賀平野の地方とは若干異なる様相をもっていたことが予想される。そこでもし、群のあり方の類似の背後に同じ原理が存在すると考えてよければ、玄海灘沿岸地方においては、他地方に先がけて世帯原理が血縁原理より優位にたったと考えることができるであろう。これは、山口県豊浦郡土井ヶ浜遺跡の弥生前期末から中期初頭にみられる様相（春成 1982a）からしても、あり得ないことではない。

しかし、これらの諸遺跡においては、その土地の出身者と他集団からの婚入者とを区分する抜歯・装身具着装は稀であるし、埋葬施設の構造差も認めがたい。その点からすると、その世帯原理は内部から出自原理を排除したいわば純粋なものであったように看取される。

3 西九州の居住規定

西九州の初期の弥生時代墓制のなかには支石墓が含まれているが、支石墓は本来的に朝鮮半島渡来の墓制であり、それをのこした人々の性格については別に考察を必要とするので、ここではより在地性のつよい長崎・佐賀・熊本の諸県下の沿岸部の墓地を分析することにした。これらの遺跡においては、石庖丁や朝鮮系磨製石斧群の出土が皆無または稀有であることから、水稻耕作は行っていたとしてもその比重は低く、漁撈活動が主体であったことは、明らかである。このような、縄文時代的な生活様式を弥生時代までもちつづけた人々をもって、西九州の代表とすることにおそらく異論はあるまい。

a 長崎県長崎市深堀遺跡

長崎半島の中ほどの西岸に位置する遺跡で、1964～65年の長崎大学解剖学第二教室・別府大学考古学研究室を主体とする調査によって、弥生時代関係では、前一中期に属する墓地の一部が明らかにされている（内藤編 1967）。墓の数を埋葬型式別に示せば、箱式石棺1、甕棺7、土坑墓17である。そのうち、性・年齢が判明しているのは、箱式石棺内の2体、甕棺内の2体と土坑墓の14体で、その内訳は成人男性4、女性8、幼小児6体である。

調査はトレンチ発掘であったために、墓地の全体の状況は明らかでないが、現状では西側と東側の2個所の遺体密集部が認められる。西群では、土坑に葬られた女性5体、男性1体、幼児1体（甕棺、貝輪着装）が密集し、その周囲に男性1体、女性1体、小児1体（貝輪着装）、幼児1体（甕棺）が分布している。それに対して東群では、箱式石棺内に時期をちがえて合葬された男女2体を中心に、性不明成人2体、幼小児2体が密集し、やや離れて女性1体（無抜歯、貝輪着装）が見出されている。西群・東群ともにトレンチ内での分布状態からすると、その外まで分布はひろがっているとみるべきであろうが、特に注意される点は、西群に女性を主体とする墓群の傾向がうかがえることである。これは、裏返していえば、近接する別地点に男性を主体とする墓群が埋もれていることを暗示している。おそらく16号土坑墓はそのうちの1基である可能性がつよい。東群は検出人骨が少ないうえに、性不明の2体が含まれているために、西群のような傾向があるのかどうかは不明であるが、可能性としてはあろう。

本遺跡では、上顎犬歯の抜歯習俗が認められるが、西群では6体抜歯、2体無抜歯、東群では1体抜歯、2体無抜歯であった。東群の箱式石棺内の合葬男女は、先葬の3号男性は無抜歯、追葬の2号女性は無抜歯されていた。この地方でも、抜歯習俗は弥生後期には途絶えることからすると、深堀遺跡における無抜歯人骨は中期のなかでは相対的に新しい年代を与えてよいと思われる。そうであれば、西群の11号、12号などは新しい一群と考え、すぐ北の7体と対立的にはみないほうが妥当であろう。

さて、本遺跡でいま一つ注目される点は、貝製腕輪の着装頻度の高さと着装者の性である。すなわち、成人14体のうち5体に、幼児6体のうち2体の計7体に着装がみられたが、成人例はいずれも女性であった。

以上、深堀遺跡の墓地から看取される特徴は、男女の埋葬地点が近接しつつも分離されていること、かかるグループがいくつか存在するらしいこと、装身具の着装者が女性と幼児に限られていること、の三点である。

b 長崎県佐世保市高島町宮の本遺跡

宮の本遺跡は、佐世保市の相浦港の沖合約6kmの海上に位置する高島に所在し、島の北と南の山を結ぶ大きな砂丘上に弥生時代墓地が営まれている。調査は1977年～1980年の間に4次にわたって佐世保市教育

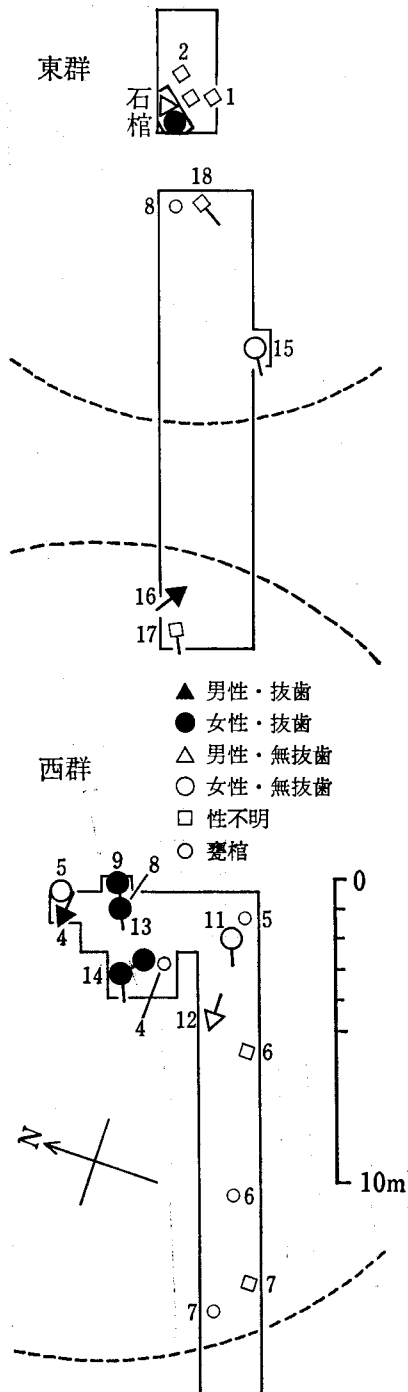


図5 長崎県深堀遺跡の遺体分布
(内藤編 1967原図から作成)

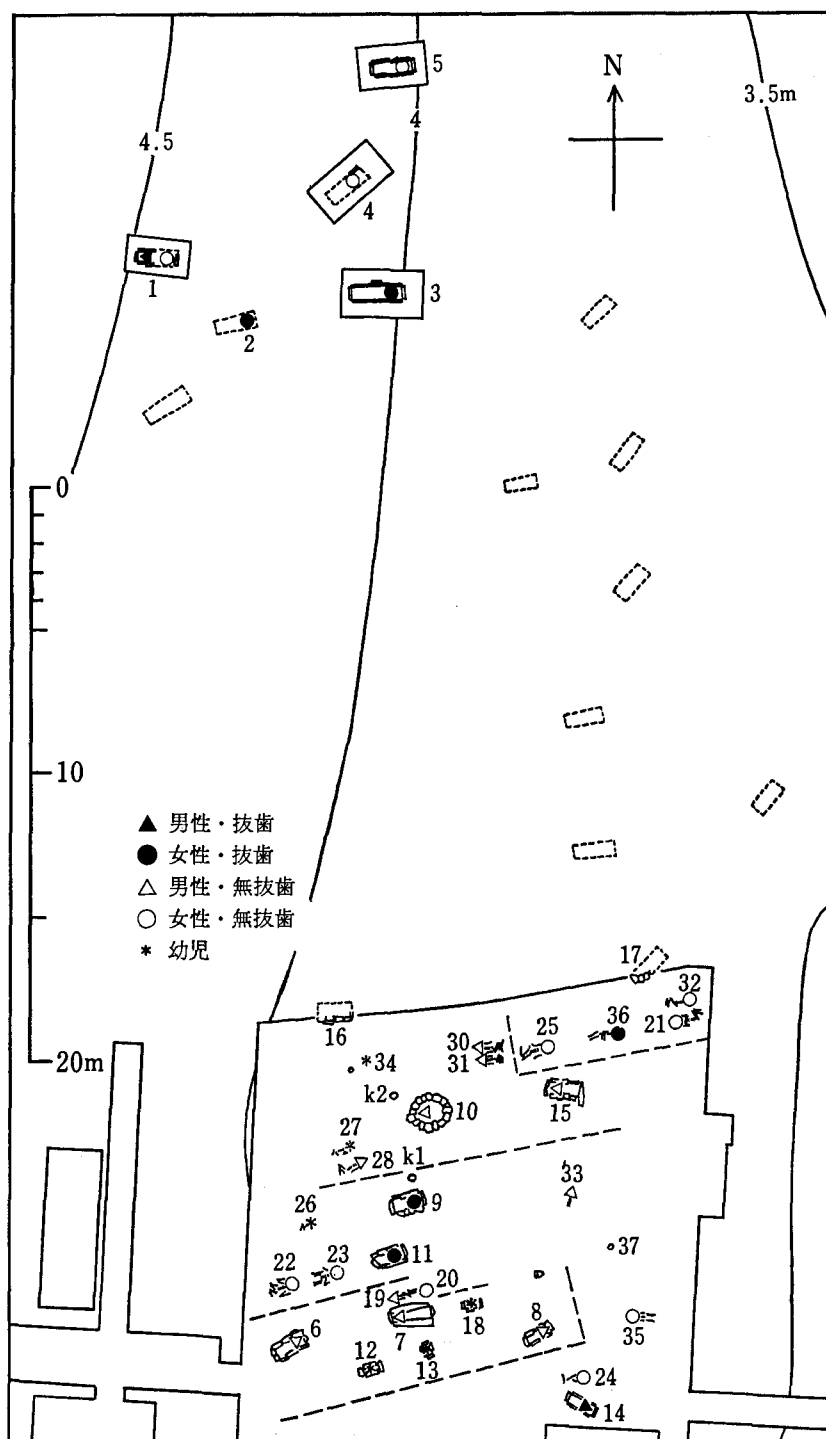


図6 長崎県宮の本遺跡の遺体分布 (久村編 1981原図から作成)

委員会により緊急調査として実施された（久村編 1981）。墓域は18m×50mの帯状を呈し、箱式石棺25基、土坑墓18基、壺・甕棺墓3基の存在が確認されている。出土人骨39体は成人30体（男性13、女性17）、幼小児9体である。

遺体の大部分は、東北東—西南西のどちらかを頭位としているが、男性・女性ともそれぞれ4体前後、縦に並ぶ傾向をもっており、小さなグループをつくっているようにみえる点が注目される。

抜歯は、上顎犬歯のみ抜去のO型だけが知られている。松下孝幸氏は、9号女性、14号男性、36号女性の3体にそれを認めているが、筆者の観察ではさらに、2号女性、3号女性、11号女性にもみられた。したがって、男性1例、女性5例に抜歯は認められ、抜歯していない男性は3例、他は保存状態が悪く抜歯の有無は不明であった。抜歯していない個体は多分若干新しいのであろう。

貝輪を着装していたのは、女性17体のうち7体、幼小児9体のうち1体の計8体で、男性13体には1体も見出せなかった。すなわち、女性の半数未満が貝輪をつけていたことになる。

c 長崎県平戸市根獅子遺跡

根獅子遺跡は、平戸島の西海岸の入江に面した砂丘上に立地する墓地遺跡である。1933年に人骨の遺存する箱式石棺2基が発見され、さらに1941年にも人骨が発見され、それらは1950年、京都大学平戸学術調査団によって再発掘された。人骨は金関丈夫氏らによって研究され、形質および抜歯の習俗が明らかにされた（金関 1951、金関・永井・山下 1954）。

その後、1972年にいって長崎大学解剖学第二教室によって発掘調査が実施され、新たに人骨9体が検出された（坂田 1973）。

1933年発見の石棺2基と長崎大学調査の土坑墓5基、石棺4基の配列状態は、遺体の頭位を東または西方向に向け、また一定の群集を示しているが、いかんせん、調査がまだ部分に終わっているために、墓域の形状をおさえ遺体配置の法則性をつかむことは困難である。わずかに指摘できることは、貝輪を着装した1933年発見の2体と5・6・7号人骨が近接し、一グループをなしていた可能性があるといえることくらいである。

根獅子遺跡で検出された抜歯人骨は、やや不確実なものを含めて9体ある。それらは、筆者のいう上顎犬歯のみ抜去のO型、上・下顎犬歯抜去の2C型、上顎犬歯・下顎全切歯抜去の4I型から成りたっている（表6）。その性比は、4I型が男性1例

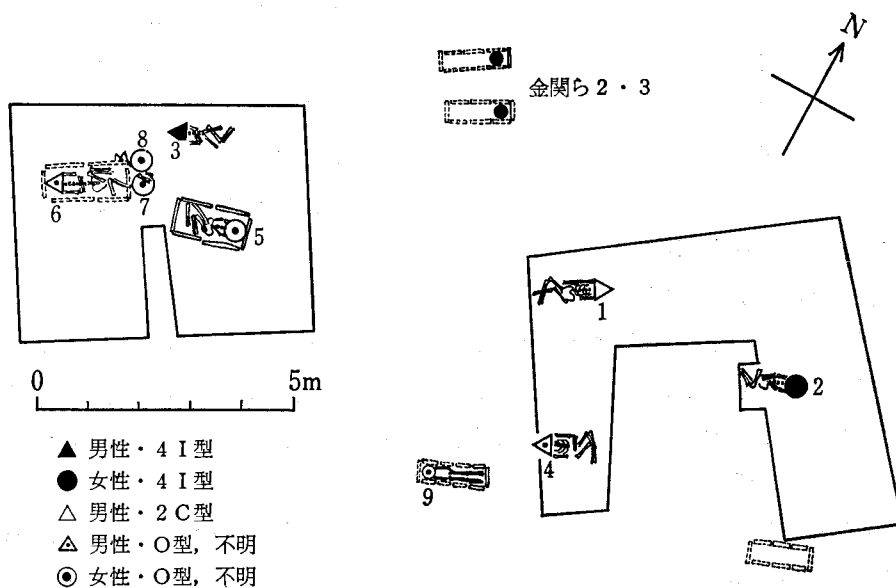


図7 長崎県根獅子遺跡の遺体分布（坂田 1973原図から作成）

表6 根獅子遺跡の抜歯（A：壮年，M：熟年，／：亡失，×：空歯槽，△：歯槽閉鎖）

人骨番号	性	年齢	抜 歯 式	抜歯型式	装 身 具
金関ら 1	♂	A	$\frac{(C)}{--C--} \frac{--}{--I--}$ ゝ磨耗なし	O型？	
" 2	♀	M	$\frac{-C--}{--I--} \frac{--C-}{--I--}$	4I型	貝輪
" 3	♀	A	$\frac{-C--}{--I--} \frac{--C-}{--I--}$	4I型	貝輪
" 4	？	約7歳	なし		
長崎大 1	♂	M	$\frac{-C--}{--C--} \frac{--CP}{--I--}$	2C型	
" 2	♀	A	$\frac{-C--}{--I--} \frac{--C-}{--I--}$	4I型	
" 3	♂	M	$\frac{--}{--I--} \frac{--}{--I--} \frac{--}{--I--} \frac{--}{--I--} \frac{\Delta}{--}$ ？ ？	4I型？	
" 4	♂	M	$\frac{-C--}{--C--} \frac{--C-}{--I--}$ × ？	O型？	
" 5	♀	M	$\frac{--}{--I--} \frac{--}{--I--} \frac{--}{--I--} \frac{--}{--I--} \frac{?}{C}$	O型	貝輪，勾玉
" 6	♂	A	？	？	貝輪
" 7	♀	？	？	？	貝輪
" 8	♂	M	$\frac{C}{--} \frac{--}{--I--}$	O型	

に対して、女性3例、2C型が男性1例となっており、他にO型が男性3例、女性1例ある。

根獅子遺跡の時期は弥生前期末から中期とされているが、4I型と2C型の抜歯型式が対立・併存する西日本縄文晩期の様相をのこしているのは、いまのところこの根獅子遺跡だけである。すでにとりあげた深堀遺跡や宮の本遺跡では、上顎犬歯のみ抜去のO型だけがみられるのである。したがって、根獅子遺跡のO型も縄文晩期のO型ではなく、弥生中期のO型とみなして、4I型・2C型の諸遺体よりも相対的に新しいと考えたほうがよいであろう。すなわち、さきにグループと考えたうちでは東北の遺体群が古い時期の埋葬とみなされる。

d 佐賀県東松浦郡呼子町大友遺跡

大友遺跡は、もと末盧国に属し、玄海灘に面する呼子海岸の砂丘上に立地する。しかし、呼子海岸はすでに唐津湾をこえた西方であり、平野部の少ない西九州の東端というべき位置にある。発掘調査は、1967～1980年の間に4次にわたって佐賀県教委、佐賀大学、長崎大学解剖学第二教室などにより行われ、箱式石棺、配石墓、支石墓、土坑墓、甕棺墓など161基に及ぶ弥生前期後半～後期前半の埋葬遺跡が明らかにされ、出土人骨は145体以上（うち弥生人骨は129体とされる）に達している（磯谷ほか 1981、藤田ほか 1982、内藤 1982）。

人骨の分布状態はまだ報告されていないので検討はできない。出土人骨の形質は、低・広顔で低身長の人骨の特徴をつよくのこしていた。また、抜歯習俗をもっており、その様式は、上顎左右犬歯の抜去のO型が9例と多いが、下顎全切歯抜去の4I型が2例、それに犬歯抜去を加えた4I2C型が4例検出されている。しかし、4I型のうち5例までは上顎歯が抜去されておらず、縄文晩期の系譜をひいてはいるものの、すでに崩れていることは明らかである。なお、他に上顎または下顎の左側切歯だけを抜いた異型式がそれぞれ1例ずつ認められることも注目される。

装身具は貝輪・管玉などの着装が知られている。貝輪は、129体のうち男性3体・女性5体・性不明成人4体・小児2体の計14体の着装人骨が発見されている。そのうち、ゴホウラ製品は男性2体、ベンケイガイ製品は男性1体、イモガイ製品は男性1体・女性2体、オオツタノハ製品は男性2体・女性2体・小児2体が着装していた。また、管玉は男性4体・女性5体・性不明成人4体・小児1体が着装していた。すなわち、装身具着装者は、ゴホウラ製腕輪が男性に限られているが、総体としてみれば、男女比はほぼ1対1の割合であった。この点では、西九州の他の遺跡とは若干様

相を異にしているわけで、西九州と北九州の中間的なあり方を示しているといえよう。

e 熊本県天草郡五和町沖ノ原遺跡

沖ノ原遺跡は天草島の西北端に位置する遺跡で、1973年に長崎大学解剖学第二教室によって調査され、縄文・弥生時代に属する人骨27体が検出された（内藤 1973）。そのうち、第4トレンチから出土した16体が弥生時代前期中葉から後葉（板付Ⅱa～Ⅱb式）に属すると考えられている。

人骨は頭蓋骨の破損が著しいが、残存している資料中には抜歯例は認められなかった。推定身長は男女ともに低く、縄文人との間に明瞭な差は存在しなかった。ただし、上腕骨・尺骨は男性においては縄文人男女に近似しているのに対して、女性のばあいは縄文人男女とも弥生人男性とも異なる特徴をもっているという。

16体の人骨のうち10号の1体だけはトレンチ北側で、やや離れていたが、他の15体は7.5m×5.4mの範囲に集中し一群をなしていた。頭位は、6・12・20号の3体が北または南方向であるほかは、12体が東または西方向である。特に注意される点は、女性6体が近接して埋葬され、その周囲に男性8体が配列されているようにみえることである。男性群と女性群との間に明瞭な境界となる遺構が存在するわけではないが、弱度の男女別があるとみなしてよいだろう。壺形土器が副えられているのは3例とも男性、女性にはアワビ2枚を副えたものが1例あるにすぎない。男女間に明瞭な優劣

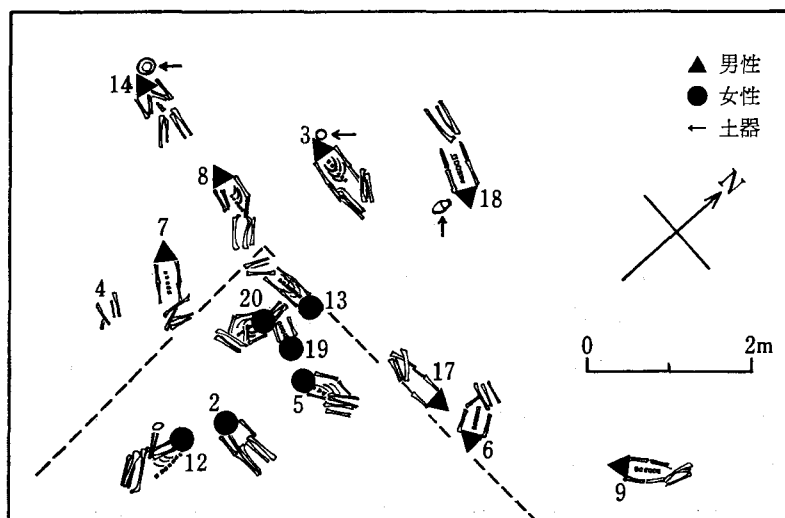


図8 熊本県沖ノ原遺跡の遺体分布（内藤 1973原図から作成）

の関係をうかがうことが困難であるのは、同遺跡の縄文後期と変るところはない。

f 西九州漁撈社会と居住規定

以上に検討してきた西九州の諸遺跡の所在する沿岸部は、可耕地が少なく、弥生時代にいたっても、水稻耕作をかりに行っていたとしても、生業の主体はあくまでも縄文時代以来の漁撈活動であったと推定されている地域である(小田 1970)。また、出土人骨も高顔・高身長 of 北九州とちがって、低顔・低身長の縄文人の特徴をもっており、縄文時代以来の在地性のつよい集団であったことをよく示している(内藤 1971, 1981, 内藤・松下 1981)。

したがって、各種の習俗においてもまた縄文時代の伝統を色濃くのこしているのも当然であろう。

まず、深堀、宮の本、沖ノ原の諸遺跡の墓地内にみられる男女の区別は、縄文前期の熊本県宇土市轟遺跡(浜田・榎原 1920, 清野 1920)や後期の福岡県遠賀郡山鹿遺跡(九州大学解剖学教室編 1972)にみられる一種の男女別墓制(春成 1983b)の遺制を思わせる。

また、弥生時代西九州における装身具着装のあり方は、縄文後期の福岡県遠賀郡山鹿遺跡(九大解剖学教室編 1972)と弥生中期の長崎市深堀遺跡とを比較すると、着装頻度が高く、しかも女性に集中するなど、縄文時代後・晩期の様相を基本的に継承している。そこで私は、装身具着装者を婚姻後も出身集団にとどまった者、無着装者を他集団からの婚入者と想定する。したがって、装身具着装者が女性に偏る集団にあっては妻方居住婚が支配的であったと考えることになる。

そのように考えてよければ、長崎県大浜、浜郷、深堀、根獅子、佐賀県大友遺跡等において貝製腕輪の着装者が女性に著しく偏在している事実から、西九州の沿海地域においては、妻方居住婚が支配的であったと推論されることになる。

同じことは、抜歯習俗の分析からもいえる。九州の弥生時代における抜歯習俗は、弥生前期末～中期のある時点をもって、若干の例外をのぞくと、大部分の地域で消滅する。また、縄文晩期に盛行した4 I型と2 C型の組合せからなる婚姻抜歯の習俗も、そのままの形で保存されているのは、いまのところ、平戸市根獅子遺跡の集団においてのみである。東松浦郡大友遺跡のばあいも、下顎の中・側切歯、犬歯を抜去しているにもかかわらず、上顎犬歯を抜去していない例を混えるなど、全体に様式の乱れが目につく。そして、長崎市深堀、佐世保市宮の本遺跡や北松浦郡(宇久島)松原遺跡(内藤 1969, 内藤・長崎 1973)、南松浦郡(中通島)浜郷遺跡(内藤・長崎

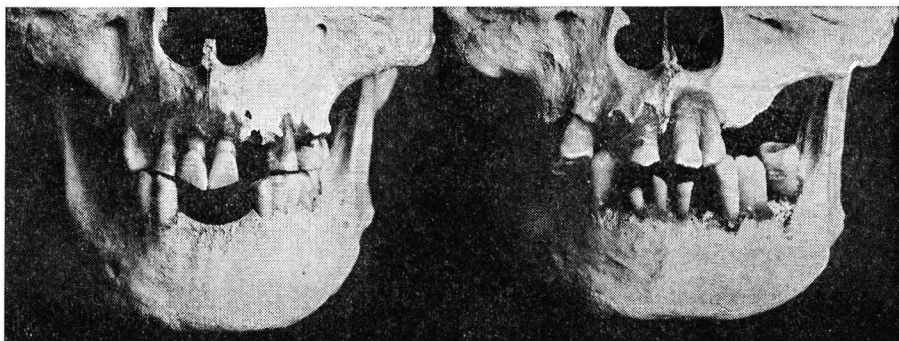


図9 根獅子遺跡の抜歯（左 4I型 長崎大2号女性，右 2C型 長崎大1号男性）

1973)においては、すでに上顎犬歯のみ抜去の成年抜歯のみに収斂しているのである(春成 1974)。したがって、婚姻抜歯における二型式から居住規定を推定しうるのは根獅子遺跡だけであるが、縄文晩期の4I型を身内、2C型を婚入者の抜歯型式とする筆者の考え方からすれば、根獅子集団では、4I型の男女比が1対3、2C型が男性1であるから、妻方居住婚が支配的であったことが、結論として導きだされるのである。

根獅子集団が、海岸部に居住し、北九州では稲作中心の時代になった弥生前一中期においても、漁撈活動に重きをおく生計を営んでいたことは確かであるが、こうした漁撈主体のあり方は、基本的に西九州の沿岸部の佐賀県東松浦郡大友遺跡や長崎市深堀遺跡、五島列島の北松浦郡松原遺跡、南松浦郡浜郷遺跡においても共通するところであろう。したがって、平戸島において妻方居住婚が優勢であるとすれば、それは西九州の沿岸部一帯の一般的かつ縄文時代以来の特徴として敷衍化することも一応可能であろう。

けれども、居住規定は一般にその社会における性的分業の体系と密接な関係をもっているとされている(マードック, G. P., 内藤監訳 1978)から、おそらく男性主体に遂行されたであろう漁撈活動の比重が重ければ、その社会は夫方居住婚に傾くと考えるべきであるかもしれない。この点については、次節でとりあげることにする。

4 南九州の居住規定

ここでいう南九州とは、鹿児島県のことであるが、遺憾ながら分析の対象としうる埋葬遺跡の細かな報告例を欠いている。時期は古墳時代併行期までくだると思われる薩摩半島の指宿郡山川町成川遺跡の資料（田村編 1973）も、遺存度が悪いうえに分析するうえでの指標を欠いている。そこで本稿では、種子島の2遺跡の不十分な資料を用いて見通しのみを述べておくことにしたい。

a 鹿児島県熊毛郡南種子町広田遺跡

広田遺跡は種子島の東南海岸の砂丘上にある埋葬遺跡で、1957年～59年の3次にわたる調査によって113体の人骨が検出され、それに伴う貝札は特に有名である。遺跡の上限は弥生前期で、中・後期におよぶとされているが、埋葬そのものは後期を中心としているようである。調査結果は第1次分だけが公表され（国分・盛園 1958, 国分 1964）、第2・3次分は現在報告準備中である。

第1次調査分も遺体の配列状態は図示されていないので、ここでは貝輪と抜歯の問題からのみ若干の考察を加えておくにとどめる。

広田遺跡では、貝輪を着装した遺体あるいは貝輪の所属を明らかにしえた遺体は、113体中42体で高率であった。42体のうち性別の判明したものは28体で、不明の14体は成人12体、少年1体、小児1体である。28体の性比は、女性19体、男性9体で、女性が男性のほぼ2倍で多い（三島 1968: 228）。

そのいっぽう、広田遺跡では上顎歯の片側だけを抜去する抜歯習俗の存在が確認されているが、側切歯のみ抜去を第1様式、側切歯と犬歯の抜去を第2様式とする永井昌文氏によれば、左右と性との関係は表7のとおりである（永井 1961）。

表7 広田遺跡の抜歯

		右	左	計
男 性	第1様式	3	3	6
	第2様式	6	11	17
	計	9	14	23
女 性	第1様式	4	3	7
	第2様式	3	6	9
	計	7	9	16

永井氏は、「様式と年齢・墓域・層位などとの相関は見出し得ない」といい、二つの様式は「施行の目的からは同一の型式に属し、ただその効果を強調誇示せんがために、第2様式が第1様式から派生したものではないか」と考えている。筆者もそう考えてよいと思うが、気になるのは左と右の区別である。

男性においては、左14体に対し右9体、女性

においては左9体に対して右7体、ともに左の抜去例が多いが、この傾向は女性のばあいは男性ほど明瞭ではない。ここで想起するのは、貝輪着装者・無着装者と抜歯の左右との間に何らかの相関関係があるのではないかと、ということであるが、この点についてはこれまで言及されたことがなく不明である。しかしながら、貝輪の着装者が37.2%、これから着装頻度の低い幼小児を差引けばその比率はもっと高まると予想されることから、筆者は貝輪着装者の抜歯は左または右のどちらかに偏るのではないかと想像するのである。

b 鹿児島県熊毛郡中種子町鳥ノ峯遺跡

鳥ノ峯遺跡も種子島に所在し、その東海岸の砂丘上に立地する。砂丘の後背地は現在、向井浦の水田地帯となっている。調査は盛園尚孝氏らにより1961年の春・夏および1971年の三次にわたって実施され、うち第1・2次調査で計18体の人骨が検出されている（盛園 1961, 中種子町郷土誌編集委員会編 1971）。第3次調査は第1・2次調査地点の北東約140mの地点で行われ、14体（うち2体は熟年女性と幼児の合葬）検出されている（藤田 1968:260）。

墓の型式はすべて、遺体の上に自然礫を楕円、円、長方形に配列したいわゆる覆石墓である。その構成は、1次調査分は男性2、女性1、不明2で、2次調査分は男性5、女性6、不明1、乳幼児2（うち1は女性と合葬）であった。

現場で確認された抜歯は、すべて上顎の偏側性の様式で、その細部は表8のとおりである。すなわち、左側を抜歯する例は男性2、女性2、右側を抜歯する例は女性2である。おそらく、左右とも男女ほぼ同数というのが実態なのであろう。

表8 鳥ノ峯遺跡の抜歯

左側切歯	男性	1
	女性	2
左側切歯・犬歯	男性	1
	女性	—
右側切歯	男性	—
	女性	2

装身具としては1・2次調査時の人骨ではなく、3次調査分のみ貝製腕輪が伴ったが、着装者は女性3体であった（三島・橋口 1977）。すなわち、着装頻度は3次調査時の成人13体のうちの3体にすぎず低かったが、いずれも女性である点は注目されてよい。広田遺跡とのちがいは、若干の時期差の可能性がつよい。

c 漁撈社会における双系制の問題

以上に概述した種子島の2遺跡から考えられるところは次のとおりである。抜歯については左または右の側切歯・犬歯を抜去しているが、その割合はほぼ1対1であ

る。そして、それぞれの型式内での男女の比率もまた似かよっている。抜歯の左右と貝輪の着装者との関係は不明であるが、成人の着装率は広田遺跡では40%をこえている。筆者は、すでに述べたように、貝輪の着装者はその集団の出身者ではないかと推定し、さらに抜歯の左または右の別に対応するのではないかと臆測するが、そうとすれば、着装者の男性1に対して女性2～3という性比は、この社会においては妻方居住婚が優勢な選択居住婚の形態をとっていたことを示しているといえよう。

前章と本章において、西九州と南九州の漁撈社会の居住規定について問題にしたが、その結果、西九州では妻方居住婚が弥生前一中期においてもまだ支配的であったのに対して、南九州では弥生後期には妻方居住婚がまだ優勢ではあるけれども夫方居住婚の事例が増加する傾向にあることを明らかにした。

この点に関して、甲元真之氏(1974:93)は、西・南九州の弥生時代には「採集や漁撈に力点がおかれて」おり、「当時の姿は、十九世紀までの南西諸島に一般的であった半農半漁の生活様式、すなわち男性はトビウオなどの漁撈に従事し、女性はアワなどの陸耕を営む状態を思いおこさせるものであり、彼らの社会もまた双系的な構造をもっていた」と考えている。そして、本州西端の中ノ浜や土井ヶ浜遺跡をのこした弥生前期の集団に関しても同様に、双系制の社会を想定している。

けれども、漁撈社会における居住規定は一般的に選択居住婚が整合的であるとしても、それがただちに特殊・具体的な縄文・弥生集団にもあてはまるかとなると、それはまた別の問題であって、それ相当の資料操作がなされなければならない。いずれにせよ、ここに選択居住婚をとるか、妻方居住婚優勢ととるかで両説対立することになるのであるが、そうはいつでも、ともに妻方居住婚がかなりの割合で存在するという点では完全な一致をみているのである。ただこの点について付言しておく、特に、南西諸島における双系的傾向も静的かつ固定的な統合状態を示すものであるという保証はない、という問題がのこされている。すなわち、その双系制は母系制から父系制への移行期に位置するそれでないとは断じえないのである。南西諸島の親族組織にもまた歴史が存在した可能性を考慮・検討する必要があるのである。

5 結 語

以上に述べてきたように、九州においては縄文時代を通して妻方居住婚が支配的であったが、北九州では弥生中期に選択居住婚の時期を迎えるのに対して、西九州では弥生中期はまだ妻方居住婚が支配的であった。そして、南九州では弥生後期は妻方居

住婚が優勢ではあったが、夫方居住婚が増加しつつあり、選択居住婚の様相を呈しはじめていた。

したがって、選択居住婚の北九州では、双系的な出自関係があったように考えられるかもしれない。しかし、2行配列墓地から、一居住集団の構成員が出自の別を基準にして二分されていたことはわかるが、他集団からの移入者群は出身集団なりによって細分されるのではなく、一括されているという事実がある。このことは、個々人の出自関係が「父系や母系の両方もしくはいずれかの系統を任意にたどりながら社会的結合を行なう」（甲元 1975：91）のではなく、その土地の出身者を通してのみ祖先と結びついていたこと、そして婚出後は出身集団との関係が切れてしまう一方、婚出先集団においては他所者として厳密に区別されるというきわめて不安定な立場にあったことを暗示する。これは、選択居住婚がただちに出自規定として双系制を導くものでないことをも示唆している。こうして、当時の九州にあっては人口も稠密で先進的な地方であった北九州においても、依然として居住集団は相対的に自立した、あるいは個別分散的な性格がつよかった、ということをおもざるをえない。

縄文時代以来の妻方居住婚を温存していた西九州のばあいも、性別分業の貫徹の上に成立する居住集団の性に基づく二分、ならびに居住集団単位の小規模な漁撈活動が個々の居住集団に対して、個別分散的な性格を否応なく与えているという点では共通していた。しかも、婚出入する人物の大部分は男性であったから、男性集団内部の矛盾はむしろ少なく、それなりに安定した社会を維持していたと思われる。そして、そのことが他面において西九州の沿岸部集団に停滞的な性格を持続させていたのであった。

それに対して、夫方居住婚が増加しつつあった南九州では、男性同士あるいは女性同士で各種の権利の享受をめぐる軋轢を惹起しつつあったと思われる。種子島の諸遺跡で確認される抜歯の左・右二型式、多産する貝製装身具も、おそらく出自規定と一定の関連をもちつつ発達したものであったろう。しかし、このばあいも居住集団の人口が少なかったことは西九州と同様であって、しかも、出自のちがいが個々の居住集団単位で完結するという点でも共通していた。したがって、西・南九州ではともに、個々の居住集団をこえた集団間の緊密な結合を実現していくには大きな制約が存在したが、他面、彼らの社会自体はその必要を認めていなかったのであった。しかしながら、西九州においても中期には抜歯習俗は成年式におけるそれだけに収斂しつつあったし、婚姻抜歯すなわち出自にかかわる抜歯習俗をもっていた南九州においても、弥生後期～古墳時代初めにはそれを喪失している事実、さらには薩摩半島南端の

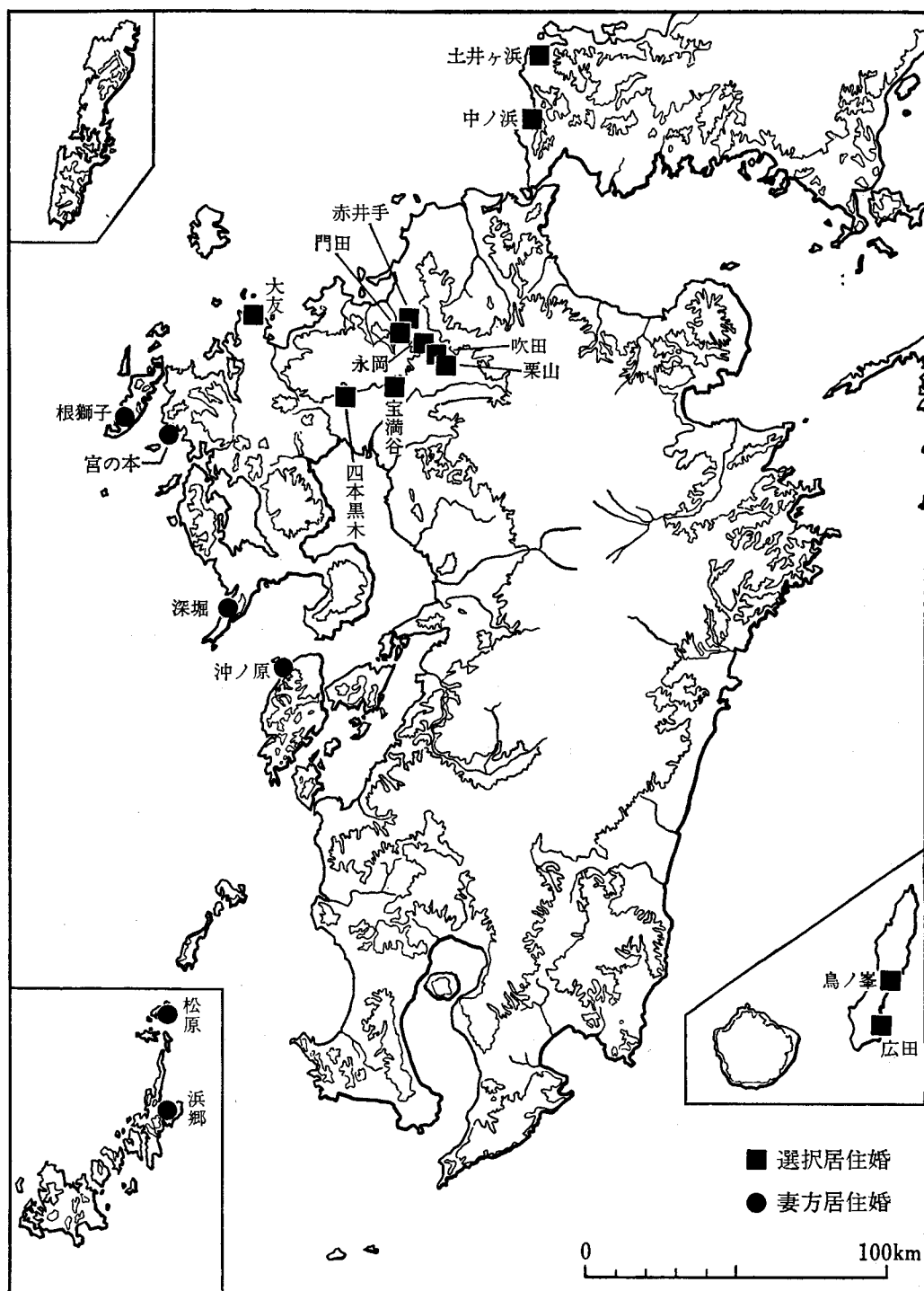


図10 九州弥生時代の居住規定（本州西端は前期，北九州は中期，西九州は前一中期，南九州は後期を示す）

成川遺跡の墓地では装身具着装例が皆無であった事実（金関 1974：114）に象徴的に示されるように、出自一狭隘な血縁的紐帯を統合の原理とする社会は後退しつつあったのであり、ここにもたとえ小規模であろうとも稲作の開始に伴う新しい波は確実におしよせていたのである。

謝 辞

小論執筆の準備段階では、九州大学医学部永井昌文、長崎大学医学部内藤芳篤・松下孝幸、福岡県教育委員会橋口達也・浜田信也・佐々木隆彦、九州歴史資料館高倉洋彰、筑紫野市教育委員会山野洋一、世界学習館木下尚子、西之表市教育委員会鮫島安豊の諸氏から関係資料の実査にあたって多大の便宜をはかっていただき、また種々ご教示をいただいた。さらに、執筆の過程では参考文献として掲げた諸氏の論攷から多くを学んだ。困難な調査を遂行された関係諸氏とともに記して謝意を表する次第である。

(1983・7・30)

参考文献

- 朝倉高校史学部 1969『埋もれていた朝倉文化』朝倉高校。
石川栄吉 1970『原始共同体—民族学的研究』日本評論社。
磯谷誠一・乗安整而・永井昌文・内藤芳篤・松下孝幸・分部哲秋 1981『佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨』（『大友遺跡』別刷）。
井上裕弘編 1978『春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡辻田地区墓地群の調査』『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9，福岡県教育委員会。
小田富士雄 1970『五島列島の弥生文化』『人類学考古学研究報告』2，1～50，長崎大学医学部解剖学第二教室。
折尾 学編 1970『金隈遺跡第一次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書，7，福岡市教委。
——編 1971『金隈遺跡第二次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書，17。
鏡山 猛 1956『北九州の古代遺跡』至文堂。
—— 1957・59「環溝住居址小論(三)・四」『史淵』74，43～62，78，30～60。
金関丈夫 1951「根獅子人骨に就いて(予報)」(京都大学平戸学術調査団編)『平戸学術調査報告』86～89，京都大学平戸学術調査団。
——・永井昌文・山下茂雄 1954「長崎県平戸島獅子村根獅子免出土の人骨に就て」『人類学研究』1—3・4，178～226。
—— 1973「人類学から見た古代北九州人」(福岡ユネスコ協会編)『古代アジアと九州』九州文化論集，1，179～212，平凡社。
—— 1974「人骨」(田村晃一編)『成川遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告，7，109～116。
—— 1976『日本民族の起源』法政大学出版局。
唐津湾周辺遺跡調査委員会(代表・岡崎敬)編 1982『末盧国』六興出版。
木下 巧編 1974『金立開拓遺跡』佐賀市文化財調査報告書，10，佐賀市教委。
九州大学医学部解剖学教室(永井昌文)編『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団。
清野謙次 1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』5，81～87，京都帝国大学。
甲元真之 1974「弥生時代の社会」『古代史発掘』4，稲作の始まり，87～98，講談社。
国分直一・盛園尚孝 1958「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌』43—3，

- 1～31。
- 国分直一 1964「鹿児島県種子島広田埋葬遺跡」『日本考古学年報』12（昭和34年度），101～102。
- 後藤 直・沢 皇臣編 1976『板付一市宮住宅建設にともなう発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書，35，上巻，福岡市教委。
- 酒井龍一 1974「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』21—2，23～36。
- 1978 a「弥生中期社会の形成—畿内社会の形成とその構造—」『歴史公論』4—3，57～65，雄山閣。
- 1978 b「銅鐸—その内なる世界」『摂河泉文化資料』21，1～15，北村文庫会。
- 坂田邦洋 1973「長崎県根獅子遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』79，14～18。
- 佐々木隆彦編 1978「春日市・門田遺跡門田地区甕棺墓群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』6，福岡県教委。
- 編 1979「安德・道善・片瀬地区区画整理事業地内埋蔵文化財調査概報」『那珂川町文化財調査報告書』3，那珂川町教委。
- 編 1982『栗山遺跡』『甘木市文化財調査報告』12，甘木市教委。
- 島田貞彦 1930「筑前須玖史前遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』11，刀江書院。
- 高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20—2，7～24。
- 1981『弥生時代社会の研究』東出版寧楽社。
- 高島忠平ほか 1979「総括」『二塚山』『佐賀県文化財調査報告書』46，302～319，佐賀県教委。
- 田村晃一編 1974『成川遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告，7，吉川弘文館。
- 都出比呂志 1970「農業共同体と首長権」『講座日本史』1，古代国家，29～66，東京大学出版会。
- 1982「原始土器と女性」『日本女性史』1，1～42，東京大学出版会。
- 藤間生大 1951 a『国家権力の誕生』日本評論社。
- 1951 b『日本民族の形成』岩波書店。
- 内藤芳篤編 1967『深堀遺跡』人類学考古学研究報告，1，長崎大学医学部解剖学第二教室。
- 1969「宇久島松原遺跡の弥生人骨」『解剖学雑誌』44—3，付1，2。
- 1971「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』79—3，236～248。
- ・長崎 洋 1973「西北九州出土人骨（縄文・弥生）の風習的抜歯」『解剖学雑誌』48—1，20～21。
- 1973「沖ノ原遺跡の人骨」長崎大学医学部解剖学第二教室。
- ・松下孝幸 1981「弥生時代人骨」『季刊人類学』12—1，27～37。
- 1981「弥生時代人骨」『人類学講座』5，日本人I，57～99，雄山閣。
- 1982「弥生時代人」『末盧国』446～451，六興出版。
- 永井昌文 1961「鹿児島広田遺跡出土弥生式時代人の抜歯に就いて」『日本人類学会・日本民族学協会連合大会紀事』15，61～63。
- 1972「鹿児島県島ノ峯遺跡出土弥生時代人骨の風習的抜歯」『解剖学雑誌』47—1，23。
- 中種子町郷土誌編集委員会編 1971「中種子町郷土誌」222～230，中種子町。
- 西田和己 1980「六本黒木遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』2，1978年度，10～13，佐賀県教委。
- 橋口達也・永井昌文 1979「正原遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI，中巻，福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査—弥生時代墳墓編—，福岡県教委。
- 1979「甕棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI，中巻，福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査—弥生時代墳墓編—，福岡県教委。
- 浜田耕作・柳原政職 1920「肥後国宇土郡轟村宮荘轟貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』5，65～79，京都帝国大学。

- 浜田信也・新原正典編 1976・77「筑紫野市所在永岡壙棺遺跡」『福岡南 バイパス 関係埋蔵文化財調査報告』4 (図版編), 5 (本文編), 福岡県教委。
- 1981「永岡遺跡」『筑紫野市文化財調査報告書』6, 筑紫野市教委。
- 林 謙作 1980「東日本縄文期墓制の変遷 (予察)」『人類学雑誌』88—3, 269—284。
- 原島礼二 1968『日本古代社会の基礎構造』未来社。
- 春成秀爾 1974「拔牙の意義(2)」『考古学研究』20—3, 41—58。
- 1978「銅鐸の埋納と分布の意味」『歴史公論』4—3, 87—97。
- 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』40 (史学篇), 25—63。
- 1980「縄文晩期の装身原理」『小田原考古学研究会会報』9, 44—60, 小田原考古学研究会。
- 1982 a「土井ヶ浜集団の構造」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻, 355—376, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会。
- 1982 b「縄文社会論」『縄文文化の研究』8, 社会・文化, 223—252, 雄山閣。
- 1982 c「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』1, 1—48。
- 1983 a「弥生時代の拔牙」『考古遺跡遺物地名表』原始・古代, 604—607, 柏書房。
- 1983 b「縄文墓制の諸段階」『歴史公論』9—9, 40—51。
- 東中川忠美編 1980『宝満谷遺跡』北茂安町教委。
- 久村貞男編 1981「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書, 昭和55年度, 佐世保市教委。
- 藤田 等 1968「弥生時代の配石墓について」(金関丈夫博士古稀記念委員会編)『日本民族と南方文化』241—267, 平凡社。
- ・高島忠平・岡崎 敬・森貞次郎・山崎一雄 1982「宇木汲田遺跡」『末盧国』241—325, 六興出版。
- ・東中川忠美・木村幾多郎・内藤芳篤 1982「大友遺跡」『末盧国』365—372。
- 保存科学研究会編 1977『四本黒木遺跡発掘調査報告書』新郷土刊行会。
- 松岡 史・亀井 勇 1968「福岡県 伯玄社遺跡 調査概報」『福岡県文化財調査報告書』35, 福岡県教委。
- マードック, G. P. (内藤莞爾監訳) 1978『社会構造』新泉社。
- 丸山康晴編 1980「赤井手遺跡」『春日市文化財調査報告書』6, 春日市教委。
- 三島 格 1968「弥生時代における南海産貝使用の腕輪」(金関丈夫博士古稀記念委員会編)『日本民族と南方文化』205—240, 平凡社。
- 1977『貝をめぐる考古学』学生社。
- ・橋口達也 1977「南海産貝輪に関する考古学的考察と出土地名表」(福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会編)『立岩遺蹟』284—300, 河出書房新社。
- 盛園尚孝 1961「鹿児島県ノ峯埋葬遺跡の調査」『日本考古学協会昭和36年度大会発表要旨』。
- 柳田康雄 1982「弥生時代の甘木」『甘木市史』上巻, 215—231, 甘木市史編さん委員会。
- 八尋 実編 1980『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書, 6, 神埼町教委。
- 横山邦継編 1974『板付周辺遺跡調査報告書(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書, 29, 福岡市教委。
- 横山邦継・後藤 直編 1975『板付周辺遺跡調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書, 31。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)